

麦 作

平成29年産 小麦の総括

農政生産振興局 技術普及課 十勝農業試験場駐在

主任普及指導員（農業革新支援専門員） 池 田 勲

北海道の平成29年産小麦の収量（農林水産省大臣官房統計部公表）は、秋まき小麦532kg/10a（平年対比116%）、春まき小麦306kg/10a（平年対比98%）となった（表1）。

品質は、秋まき小麦の1等麦比率は97.6%となり、平成26・27年並に高かった。また、春まき小麦は77.0%と低かった（表2）。基幹品種である「きたほなみ」の品質ランク区分は、地域間差があるが総じてタンパク含有率がやや高く容積重、FN（フォーリングナンバー）、灰分は適正範囲内であった（表3）。

表1 平成29年産小麦の作付面積と収量（北海道）

区 分	作付面積 (ha)	収 量 (kg/10a)	平年収量 (kg/10a)	平年比 (%)	前年比 (%)
秋まき小麦	104,200	532	460	116	120
春まき小麦	17,400	306	312	98	98

注1) 農林水産省大臣官房統計部公表（平成29年11月21日）

注2) 平年収量は過去7年の豊凶年を除く5年平均

表2 品種毎の1等麦比率の推移

品種名 年 産	1等麦比率 (%)					
	H24	H25	H26	H27	H28	H29
きたほなみ	89.2	81.9	99.5	98.7	73.6	99.2
ゆめちから	72.8	68.1	80.0	88.2	70.5	82.8
キタノカオリ	73.2	96.6	97.0	99.8	63.0	99.1
つるきち	-	-	-	90.7	17.8	51.2
秋まき小麦計	88.7	81.4	98.0	97.8	73.1	97.6
ハルユタカ	72.1	91.4	89.3	94.8	50.5	93.5
春よ恋	83.5	93.7	51.8	90.4	94.0	61.7
はるきらり	88.8	91.1	89.4	99.3	97.0	98.1
春まき小麦計	83.7	93.1	59.0	91.7	91.9	77.0
小麦 計	88.4	82.3	94.1	97.3	74.9	95.3

ホクレン資料より

表3 「きたほなみ」の品質の推移（H24～29年産）

項 目	H24	H25	H26	H27	H28	H29	基準値	許容値
容積重(g/l)	858	856	863	866	851	854	840以上	-
FN(sec)	398	376	425	418	414	410	300以上	200以上
タンパク(%)	10.8	11.1	12.0	11.1	11.8	11.8	9.7～11.3	8.0～13.0
灰分(%)	1.41	1.39	1.41	1.31	1.44	1.46	1.60以下	1.65以下

注1) ホクレン扱い分

注2) 項目別加重平均値

表4 「ゆめちから」の品質の推移 (H24～29年産)

項目	H24	H25	H26	H27	H28	H29	基準値	許容値
容積重(g/l)	856	843	847	851	834	847	833以上	-
FN(sec)	445	418	461	454	427	458	300以上	200以上
タンパク(%)	13.9	14.5	15.1	13.5	14.1	13.9	11.5～14.0	10.0～15.5
灰分(%)	1.66	1.67	1.69	1.57	1.65	1.67	1.75以下	1.80以下

注1) ホクレン扱い分

注2) 項目別加重平均値

以下、生育経過を振り返りながら今後の栽培を考えていきたい。

1 小麦の生育経過

(1) 秋まき小麦 (表5)

平成28年秋のは種期は、9月23日(±0日)と平年並で出芽も良好であった。越冬前茎数も平年並であった。しかし、十勝では8月下旬からの台風等による影響で、は種期が3日遅れた。

平成29年の融雪は全道的に早く、起生期は4月6日と平年に比べ4日早くなった。空知や上川では、前年の10月下旬に根雪となり、雪腐病や冬損の被害が発生し、廃耕に至ったほ場もみられた。

幼穂形成期は5月4日(早3日)、止葉期は5月26日(早4日)で推移したが、6月は降水量が平年を上回り日照時間がやや下回ったことから生育は緩慢となった。

出穂期は、石狩で7日早く、全道の平均が6月6日(早3日)であった。

成熟期は7月21日(早2日)で登熟期間は平年より1日長い45日間となった。

成熟期の穂数は、全道平均で720本/m²(平年対比105%)とやや多くなったが、空知や上川の雪腐病や冬損の被害を受けたほ場では穂数が少なく、道央の穂数が多いほ場で

表5 平成29年産 秋まき小麦の生育状況

(月.日)

振興局	播種期	出芽期	起生期	幼穂形成期	止葉期	出穂期	成熟期
空知	9.17(早3)	9.25(早4)	4.08(早3)	5.04(早3)	5.26(早4)	6.05(早2)	7.18(早1)
石狩	9.21(早1)	9.26(早4)	4.07(早8)	5.02(早8)	5.23(早7)	6.03(早7)	7.18(早2)
上川	9.15(早3)	9.23(早4)	4.12(早7)	5.06(早5)	5.27(早5)	6.07(早2)	7.19(早1)
オホーツク	9.24(早1)	10.01(早1)	4.08(早3)	5.05(早3)	5.28(早5)	6.09(早3)	7.25(早2)
十勝	9.28(遅3)	10.04(遅2)	4.03(早4)	5.04(早2)	5.27(早3)	6.07(早2)	7.21(早3)
全道	9.23(±0)	9.30(早1)	4.06(早4)	5.04(早3)	5.26(早4)	6.06(早3)	7.21(早2)

振興局	登熟日数 出穂～成熟期	茎数(穂数)の推移(本/m ²)		7月15日の生育	
		5月15日	7月15日	稈長(cm)	穂長(cm)
空知	43日(長1日)	1,285(95%)	773(109%)	79(103%)	9.3(101%)
石狩	45日(長5日)	1,200(87%)	764(120%)	83(105%)	9.5(106%)
上川	42日(長1日)	1,021(93%)	592(101%)	79(108%)	8.9(101%)
オホーツク	46日(長1日)	1,404(91%)	792(111%)	79(100%)	8.9(98%)
十勝	44日(短1日)	1,412(87%)	688(100%)	79(98%)	8.9(97%)
全道	45日(長1日)	1,341(90%)	720(105%)	80(101%)	9.0(99%)

表6 平成29年産 春まき小麦の生育状況 (月. 日)

振興局	播種期	出芽期	止葉期	出穂期	成熟期	7月15日の生育		
						穂数(本/m ²)	稈長(cm)	穂長(cm)
空知 (初冬まき)	11.9 (±0)	4.04 (早9)	5.29 (早4)	6.08 (早2)	7.26 (早1)	851 (128%)	83 (109%)	8.5 (106%)
石狩 (初冬まき)	11.14 (遅3)	4.03 (早5)	5.31 (早3)	6.11 (早2)	7.27 (早1)	825 (113%)	87 (113%)	8.9 (100%)
上川 (春まき)	4.21 (早4)	5.03 (早5)	6.12 (±0)	6.21 (±0)	8.02 (早2)	661 (115%)	94 (106%)	8.5 (98%)
オホーツク (春まき)	4.16 (早4)	5.01 (早3)	6.13 (早2)	6.26 (±0)	8.06 (早2)	710 (114%)	79 (98%)	7.9 (99%)
全道	4.17 (早4)	5.01 (早4)	6.08 (早3)	6.20 (早1)	8.03 (早1)	736 (117%)	82 (101%)	8.1 (99%)

は倒伏がみられた。

収穫は、全道平均で7月25日(早2日)に開始となり、収穫終が8月3日(早1日)となった。

品質は、地域間差があり、総じて細麦傾向で「きたほなみ」のタンパク含有率は高めとなったものの、1等麦比率は高い状況であった(表2)。

容積重・FN・灰分は「きたほなみ」「ゆめちから」ともに品質評価基準の適正範囲内であった(表3、表4)。

病害の発生は、一部地域の雪腐病を除き平年より少なかった。

コムギなまぐさ黒穂病は、オホーツク・石狩・空知・胆振・上川で発生が確認されたが、全道における被害面積は、平成28年産の約1,000haから減少し、約400haとなった。

(2) 春まき小麦(表6)

平成28年の早期積雪により、上川の初冬まき栽培は、は種できなかつたほ場がみられた。

一方、春まき栽培では、出芽期は5月1日と平年と比べて4日早かった。

6月の低温により生育は一時的に停滞したが、7月は高温で推移したことから、その後の生育は全道的に順調に推移し、成熟期は8月1日と平年に比べて1日早かった。(初冬まき栽培と春まき栽培の加重平均値)。

穂数は、平年より多く、地域によって倒伏

したほ場がみられた。

収穫開始は平年と比べて2日早かった。収穫期間中に断続的な降雨があり、かつ低温傾向であったことから、穂発芽や低アミロの被害を受けた地域がみられた。また、7月の高温で登熟が急激に進んだほ場では細麦となった。

全道の加重平均値でのタンパク含有率、容積重、フォーリングナンバー、灰分は、品質評価基準の適正範囲内であったが、「春よ恋」「ハルユタカ」でフォーリングナンバーの低い生産物がみられた。

2 次年度に向けて

(1) 秋まき小麦

は種適期である平成29年9月に降雨が続き、は種作業が遅れた地域もあることから、融雪促進を適確に行うことが、穂数確保のポイントとして重要である。

「きたほなみ」は近年、タンパク含有率が高い傾向にある。生育量に見合った目標収量を設定の上、特に幼穂形成期以降は過剰な窒素施肥を避ける。

また、「きたほなみ」では、コムギ赤さび病が条件によって多発する可能性がある。このことから、止葉が抽出するまでに下葉に病斑が目立つ場合には、止葉抽出～穂ばらみ期および開花始(赤かび病との同時防除)の計

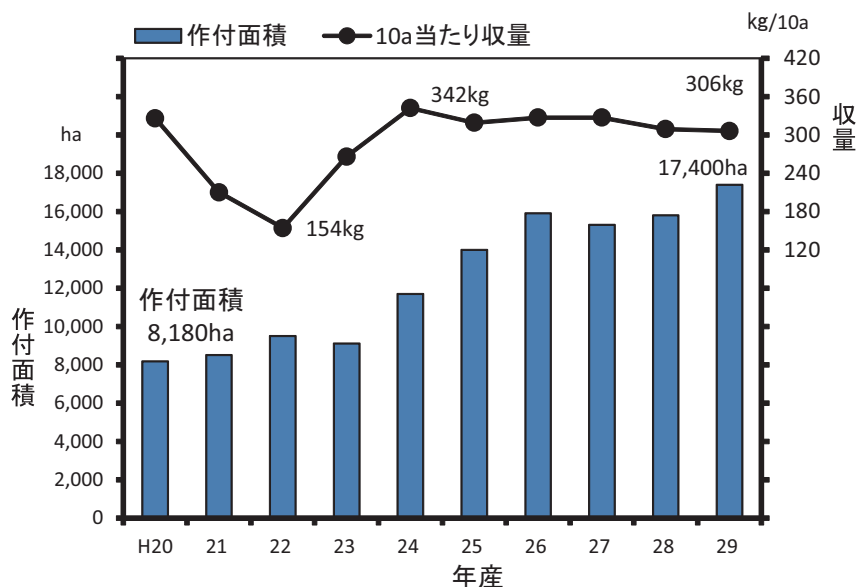


図 全道の春まき小麦の作付面積と10a当たり収量の推移
(農林水産省調べ)

2回、薬剤の茎葉散布を行う。

コムギなまぐさ黒穂病は、出穂後、早期にはほ場観察を行い、発生の有無を確認する。本病が発生した場合は、周囲のほ場への蔓延防止を図るため、すき込みなどの対策を継続する。

近年、気象要因による生育・収量・品質の変動が大きく、高位安定化が求められている。土づくりによって、根張りを確保し、干湿害に強い麦作りを行う必要がある。

(2) 春まき小麦

平成29年産の作付面積が全道で17,400haと

なり、過去10年間で最も多かった(表1・図)。

一部の地域では、春まき小麦の連作がみられることから、春まき小麦においても連作や交互作を避け、輪作により安定生産を図ることが極めて重要である。

春まき栽培の技術では、早期は種が収量確保の条件となるため、融雪促進を行い、ほ場の乾燥を促進し、早期には種できる条件を整える。また、表面水が停滞しやすい水田転換畑では、明・暗渠の整備やサブソイラによる心土破碎、額縁明渠などの排水対策を講じる。